

伊藤潔志 著

『哲学する教育原理』

『哲学する保育原理』

『哲学する学校経営』

教育情報出版

2017～2019 年

各 2,270 円 (税別)

本シリーズは「教育原理」「保育原理」「学校経営」といった授業科目での使用が念頭に置かれたテキストである。シリーズに共通するねらいは、教育、保育の思想や原理の紹介とともに、「教育とは何か?」「学校とは何か?」「子どもとは何か?」「経営とは何か?」といった根本的な問いを掲げ、読者が「立ち止まり、哲学する」ことを促し続ける点にある。また、「哲学する」ためのガイドとして、P4C や哲学カフェといった昨今の哲学プラクティスの取り組みについて複数ページを割き、踏み込んだ紹介がなされている点も、他のテキストと比較するとき目を引く特徴である。さらに、ケーススタディやふりかえりのためのワークシートも用意されており、授業においても対話やワークへのスムーズな移行が可能な工夫が施されている。

だが、白状すれば、評者自身数年前に学生として教職課程を履修したものの、当時のテキストや授業内容についてほとんど記憶がない。より一般的に言っても、現場での実践を志す学生にとっては、本シリーズが念頭に置くような原理的・基礎

的な科目を学ぶ意義を実感しづらいという課題は、これまでも共有されてきたのではないだろうか。それゆえ、こういった課題のある場で「哲学する」授業を実現するというシリーズ全体の果敢な意図自体の成否は、実際の講義テキストとしての使用の報告を待たねばならない。

他方で本シリーズはその特徴ゆえに、そもそもの出版意図からすれば副産物的な使用も期待できる。それは、今まさに、教育や哲学のプラクティスに関わろうとする学び手、あるいは実践者たちによる使用である。具体的には、「教育原理」については、教育学や教育哲学についての導入教育でのゼミや輪読用のテキストとして、「保育原理」は未就学の子どもと哲学することについて学びたい地域の実践者の参考書として、「学校経営」は数年間務めてきた教師たちが自身の現場をふりかえるための研修の資料として、読者自身の学校、教育、保育に対する信念をゆさぶり、哲学することを促してくれるはずである。

実は「立ち止まり、哲学する」ことを切実に欲しているのは、すでに現場での実践に取り組み、日々止まることなく歩み続けることを課されている実践者である。だがめまぐるしく具体的な課題が迫ってくる現場で、ひとりで「哲学し続ける」「学び続ける」ことはとても困難な営みだ。その意味では、本書を真っ先に届けるべき送り先は、大学の教室を越えたところ、つまり、自身の日々のプラクティスに悩み、ともに学び、対話する相手(テキスト)を求めている実践者たちのもとでもあると言えるだろう。

小川泰治 (宇部工業高等専門学校)